



特 253  
586

原本を出納する  
(複写は別室にて  
全冊マイクロフィルムから)

葦  
社  
編

×  
複  
写

十  
銭

ネ  
オ  
ン  
サ  
イ  
ン  
で

男  
を  
み  
れ  
ば

★  
★  
★  
男  
性  
心  
理  
の  
解  
剖

始



時253  
586



讀賣新聞社編

ネオンサインで  
男を観れば

森田書房版



目次

男つて猫みたい

……銀座會館 喬子さん……

馴らしやう一ツ

難かしいのは最初の「一言」！……

男つて女なら

……銀座黒ネコ 晴枝さん……

誰でもいゝのね

釣った・積りが釣られた話……

またか！ 卑怯な――

……グランド 香保子さん……

と思ひ乍らついでホロリ

その癖容易に參れない私達……

女に惚れ込むと

……銀座ドーム 芳子さん……

男は化ける

が惚れられると判らない……

男の肚の中は——

……グランド 米勇さん……

ひどい我利々々

何かと云ふと「損」か「得」かだ……

（ ）

カフェーの客つて

……銀座パレス 一二三さん……

イカ物食ひの中トロ組よ

煮ても生でもイケないのね……

（ ）

遊びに見榮を——

……浅草天国 桂子さん……

飾る男は落第だわ

こんなのに限つて焼トン組よ……

（ ）

女に田舎を訊いて

……サロン春 地階 眞琴さん……

夫からなんて野暮な手よ

女給にセンチは見當違ひ！……

（ ）

金や遊びの自慢で

……グランド銀座 ひさしきん……

女は釣れない

私たち女給が欲しい男は？……

（ ）

遊び好きの男は

……處女林白中隊 唄路さん……

例外なしに見榮坊よ

五月蠅い男は浮かれさす……

（ ）

女給の顔さへ見れば

……新宿樂城 糸姫さん……

飯！ 飯は随分失禮ね

イヤなお客とご飯は眞つ平！……

（ ）

私は愛してる——

……兩國トヨタ 笑子さん……

なんて頭の悪るよ

男は圖々しくて卑怯者！……

（ ）

ネオンサインで  
男を観れば

読賣新聞社編

男つて猫みたい

馴らしやう一つ

——銀座會館 喬子さん

難かしいのは最初の「一言」!

◇

「おビール? お酒?」

帽子を受取つて、どツかと殿様のやうにボックスに下腹を埋めて、ホツと安らかな溜息を吐い

た客の見上げる眼に發する此の一言、酔ひしれてゐようと、浮き／＼とジャズのやうに魂が宙に飛んでゐようと、私達は此の瞬間だけは眞剣なんです。張り切るの

「兩方持つてこい、どん／＼と……」

客同士が顔を見合せてア、笑ひ乍らこんな返事したら、思はぬ儲けがあつたか捨てゝもいゝ金のある人

「寒いから酒がいゝ熱くして……」

かう云つたら莫迦な遣ひ方はしないが普通には遊ぶ締つた方、料理だつて残しはしないと云つた――

「何か書いたものがあるだらう、一寸見せてくれ」

時間一パイ粘るが之れは雜物

「酒は後でもいゝ、まア坐れよ……」

もちかけやうで電車賃までなくしてテク／＼歩いて家へ歸るトロトロ組だが、ウドンゲの群は

喚いても二度と再び來ることはあるまいといふ。

◇

と云つた客の色分けを、此の最初の一言の反應から看取するんですもの、それやア懸命ですわ、正眼に構へての氣合ね、之がきまらないとサービスのピントが外れちやうでせう、――果物でもお持ちしませうか――と云つては不可ない、お客にうっかりさう口を滑らしたらもう駄目ですし、また私何か御馳走になるわ――と云ふ言ひを待つてる方に遠慮しすぎて云はれた通りの物しか述べないとしたら、自分と氣のきかない話でせう、利達はかうして最初はとても氣を折るの、また來て貰ひたいんですもの、ピントさへ外さずにサービスしたらきつと來るわ。

◇

所が此の二度目がまた易しかアないのよ

「まア嬉しい、縁があつたのね、うんと飲むわ」

なんて下手に云つたらもうそれまでよ、云つていゝ客もそれはあるわ、何處でさう述べてくる

かといふと、初めて見えた時の散財の工合でなの、隙あらばいざ一泡ふかさん……つて鬪志満々の輩でせう、廿圓や卅圓はまア持つてるわね、でも店では決してそれだけ遣ふもんぢやないのよ  
最初五圓で済ました方は今晚もその程度で此の前は十圓だからまア今日は十四・五圓でとーちやんと夕方から客は腹を決めてゐるんですからね、事志と違つたら、フクれたり、いきなり無理を云つたり、もう止めた……つてやうなことになつて了ふの。

サービスだつて同じよ、三、四人連でお友達のところへ来て即かに飲んでゐる方があるとする  
でせう、こんなのがいちばん気がおけないから

私孫子、宜しく

—つてやうな式にそこで酔ふわね、酔へば自分の客ぢやないからついハメを外して大膽なサービスするね、と男つて相當中が重いから次の晩必ず今度は私の名指しでくるの、さアさうなると昨夜は私酔つてゐた、今晚は私の客だ—と思ふからもう堅くなつてコチ〜でせう、氣まりは悪

いしね、と

「君、昨夜と違ふね、もう少し飲まないか、え〜」

—とくるでせう、初めての昨夜でさへあれだから、今晚あたりは……つて氣なのよ、酔へる筈がないぢやないの、かうなつて、で、つまらなさにゼ・エンドよ。

男つてだから猫ぢやないけど馴らしやう一つ、習慣のつけ方一つ、沁々さう思ふわ、時節柄花嫁御に贈る言葉—つてのにならない—

男つて女なら

誰でもいい、のね — 銀座黒ネコ 晴枝さん

釣つた積りが釣られた話

「いやアよ、誰があなたみたいな老人の云ふことなんか、おいそれときくもんですか、駄目！ お生憎さま、三月降つても照つても一晩も缺かさず來たら一度だけウンと云ふわ、口惜しかつたら通つてご覧なさいーだ」

新橋際の店にゐた時、あんまりうるさいから私かう云つたことがありますの、鐵工場かなんかの社長よ、六十位の、廿圓づゝ遣つても六百圓、三月で千八百圓、まア二千圓だわね、莫迦々々しい話ですもの、きつと來なくなると思つたの

「やう來たぜ」

「まアいらづしや」

ニヤ／＼入つてくる度に私も薄ら笑ひで最初は迎へてゐたんですけれど、一月も續くとまさかとは思つてもサア心配でねーよく續くことね、お止めなさいーといはぬばかりに側へも行かすにゐるのに、—お蔭さまでねーなんて落付いてるんでせう、困つたわ

◇

此の調子で二月完全に通つた時私もう駄目だと思つたわ、先に謝つちやうのがいゝかしら、それとも云ふことを聞くかしら……随分考へたの、寝ても起きてもその方が役にゐてエヘラ／＼してそれは憂鬱つたらないの。

◇

あと十日で三月……つて時、私たうとう謝つたわ、御免なさいーつて、たゞの御免なさいと違つてそれや辛かつたわ。

「御免なさいーちや濟まされないが、まアいゝさ、男に下手な條件なんか出すもんぢやないぜ」さう云はれた時にはホツとしたより脂汗が出たわ。

たとひ金は續いても何かの都合でつてことがあるでせう、三月に二度や三度はね、それがないの、金と暇があつてこそ出来ることですけど、男が意地になつたら怖しいと思つたわ、條件なんか決して出すもんぢやないわ、ほんとにコリた、嘘ぢやない、金なんか遣はしたつてつまんない



もの。

もうちよいと若くて虫のすく男だつたら私その時参つてゐたわね……

◇  
ところがよ、私は自分で三月一晩も缺かさずつて條件を出した男がその通り私んところへ毎晩来たんだが、他所でその方が遊ぶだの浮氣をしてゐるなんて考へてなかつたの、私んところだけ一さう信じてゐたの、無理もないでせうねえ、

どうして〜、ところが、私がこゝへきた當座店の前でバッタリ會つたの、その方に、會館の歸りだつて……後でお友達に話をきいたら、三月、三月と私んところへ通つてゐた頃もやはり會館へ毎晩現れてたんですつて、カフェーばかりぢやなく、待合へも泊ればバーへも顔を出すつてわけだつたのね、待合にも飽きたから一寸あいつの所へ寄つてみよう、バーはまだ早いからビールでもあいつにつがしてやらう。

一つてやうな工合ね、何處か他所がお目當で私はツマだつたかもしれないのね、向ふに云はせれ

ば……

◇  
これなら誰だつて金さへあれば三月や半年は續くわね、莫迦々々しいつたらないわ、こんな錯覺が女には多いんだわ、男はどれでもいいよ、廻つてゐる女のどれでも當つたので結構なのよよくきてくれる方だ一三月もの間にはさう思つて参つた女がどこかにあつたわ、私ももう一寸で参りかけたんですもの… (銀座黒ネコ 晴枝さん)

またか！卑怯な——

◇  
ご思ひ乍らついでいホロリ — グランド 香保子さん

その癖容易に參れない私達

◇  
「永いこと思つてた女房に死なれてね、どうもゐるべきものがゐないと家が陰氣で困るよ……」

またか、卑怯な、女房はあるけどちよいとつまんでみたいんだーと男らしく白状したらーと啞喉まで出ても、酒もよく飲み、遊びなれもしてゐるが、荒んだ遊びに荒んだ様子が男にないと、こんな言葉がやつぱりいちばん心に残りますね。

「嘘を云つてどうなるもんか、三晩こゝで遣ふ金があつたら一ヶ月の暮しは立つんぢやないか莫迦々々しいことは知つてはゐるが……疑ふなら一緒に家へ来いよ」

「お子さんがおありになるんなら早く歸つてあげなさいよ」

「子供も可哀さうだが俺の方がなほ不作さ」

「お上手ね」

一勤め先へ行けば、課長とか係長とか云はれる身分で、よくまあかうも出鱈目が……と輕蔑はしても、間借りの冷い階段を夜更けにソツと上つて、汚れた畳の上で「朝日」を喫ふ時など、どうしても思ひ出されるのは男のさうした言葉ね。

一氣のせるかシャツの袖口が穢れてゐた、背中にフケが落ちてゐた、世話する方がゐないからか

しらーそんなことまでウツラウツラ考へる

一一度浮氣しろい、減るもんぢやねえやー

なんて言葉ならその場限りで思ひ出すことなんかない、……が

一子供があるが来てくれー

つてのは女給のはらわたに沁みる……甘ちゃんね、女は、甘いけど減多に手付けに寝るやうなことはしないわよ、そこは採まれてゐるお蔭ね。

眞面目な話で口説く男は、来る度に少し餘計に金を遣はしてみるに限るの、勘定高く、實利的だからこそ、いちばん近道の眞面目な體當りに出るんですから、若し眞剣でないなら實利にてらして直ぐ莫迦莫迦しいと氣がついて退却するし、またいつまでもいゝ歳で退却しないでノコノコ毎夜金を捨てにくるやうな男ぢや、亭主の仇打がないわよ、莫迦な金は遣ひたくないが心持が軋つたら来てくれーと姿は見せず毎日手紙でくれる中年男がゐたら参るかもしれないけど、先づそんなの一人もないわね。

—何故つて、男は卅の半ばを過ぎたら根氣がなく、面位めんたいくさがりやになるものよ、それに一度世帯を持ってば、無駄な金つてなかなか遣へなくなるものよ、金の有難味ありがたみを知らずに女につき込むのは、若いうちだけ……

◇

根氣のない面倒くさがりのケチなこの中年男が、お定まりの體當りを用ひるから不思議さ、それを知つてゐながらホロリとし、しかも容易に參れない私達、可哀あはれさうな妙に涙ぐましい、強い私達ぢやない？

女に惚れ込むと

男は化ける

—銀座ドーム 芳子さん

が惚れられると判らない

◇

男をみるには惚れられちや駄目よ、私のやうに男除けおとことりのまじなひみたいな顔をもつて生れてきた女でなくちや判んないの、男は惚れたとなるとカメレオンのやうに顔つきから性質せいしつまで違つてくる。

「僕のお母さんは……」

平常はおつかアなんて呼んでゐるそだちの男がこんな言葉を使つたり、十圓札一枚出せば勘定は足りるのに

「えゝ八圓か……」

なんて集金してきた會社の金をみせたりすることは朝飯前だし、またこんなわざとらしいんぢやなく、惚れてゐる間は腹の底から性質が全く變るのもゐるからね。

—亂暴で片癖さげくまの悪いのが素直でおとなしくなつたり、オツチヨコチヨイがおつとりと落着いてきたり、わざとでなくよ、ザラにあるでせう、人間が變るの……惚れるとわざとにしろしんからに

しろ、とに角化けるのよ、男は女が身をまかせるまでは……  
この道理が惚れられてゐる當人には判んないね、

◇  
この私なんかには男は中年に限るねえ。

—無理はしないし話は判るし、洒落も云ふ……飲みつぶりにも金遣ひにも身體のコナシにも無理がない、遊んでゐても自然ね

結局だから永く續くわ、その代り化けたとなるとヒドイ

—女房を何人も取替へ乍ら働かして、自分はブローカーや變な事務所の看板をかけたたりしてゐるのによくある—

◇  
男をみるよりもこんなのは御執心の女の方をみた方が早く判る、親同胞を養ひ乍らコツ／＼と働いてゐる地味な女の所へは決して通はない、責任のある身體の女つてのを何よりも嫌ふ。

—顔が一寸よくて、ムラ氣で、たまにはガブ飲みをする女、旦那か好きな人の一人もあつて、犬も喰はない喧嘩も時にはやる—

そんなタイプをぬふ

—時計をやたらに出したり、肩のホコリを三分おきに拵先で拂つたり、便所から戻つてロクに洗ひもしない手をいつまでもボツクスで拭いてゐたり—  
するのがクサイ。

◇  
若い男は化けても

「喜んでくれよ」

なんて指に合はない石入りの指輪を突然買つてきたり、カフェーの時刻でもないのにきて大金を使つたりするのに相手になつたらおしまひ、保険の加入金の遣ひ込みなんかと思つて間違ひなし。

「昨日まで預つといってくれ、大事にして……」

と小さい何みなど女に頼むのは益す怪しい、三疊か四疊半を間借りして大暴風を吹かすのは何と云つても金の遣ひ方が自然ぢやないわ、無理が感じられるのよ、一緒にゐるとカンねえ、自分を好いてるナ……と思ふとカンは鈍るのだから、男をみるなら好きも好かれもしないうちよ、私なんか、でもタマにはカンが狂つてみたいものだわ

男の肚の中は――

ひごい我利々々

――グランド 米勇さん

何かと云ふと「損」か「得」かだ

假にもかうした遊びの場の女の前だ 云つちやいけない――

と紫面の時は口に出さず、腹の奥へ疊込んでおくことでも、酔ふと男はうつかり洩らすものね、その我を忘れてうつかり喋ることにかへつてその方の氣持が現れる……と云つても間違ひぢやないわね

「いゝ商賣だよ、さうぢやないかえ、客と一緒に飲んで食べて話をしてさ、骨折と云ふのはお酔と物を運ぶことだけぢやないか、さうだらう、それでお金になるてえんだ、判つてる……知つてるよ、藝者や遊女と遊ふといふんだらう、君の方はそのつもりだらうが、女の所へ来て金を遣ふ方はさうは思はねえや……」

取引先のお客や川舎の人を御馳走に連れてきた後では、きまつてかう酔つてブウ／＼云ふの、よくその言葉の裏をカミしめてみると……

待合や貸座敷なら一風呂浴びてドテラに着替へて、女を周圍において、酒を飲み、唄つて、明日の朝まで濫く眠れて……

勿論二流三流の場所でせうけど……招かれた方は如何にも満腹だ、御馳走になつたと思ふから商談

もうまく運ぶし、慰にもきる、御馳走してもかひがある、それでようく考へてみれば金高はカフェーといくらも違はないといふ意味なのね、手を握らしたり、膝の上のつたりする位が關の山だからカフェーは高いもんだ一つて譯ね。

◇

男は酒と女と金の三つは常に關聯してゐるもんだと思つてゐるからカフェーでもバーでも、待合や貸座敷とごつちやにして高いとか安いとか、得だ、損だなんて云ふのね

一興かだけさしといて、十二時になりやおつぼり出すぢやないか、後はどうしてくれるんだ、

結局高いぞ

一だつて、私達は精一パイにサービスして快い氣分にさせるのが職分ですけど、興奮するのは男の勝手ですし、その後のことまで責任は持てないわね。

◇

一汚ねえ女だつたが金を出したと思ふとつい欲が出てね、泊つてきたよ、損だもの一

遊びに行つた翌日など、男はよくこんな話をしてゐるわ、金を遣つたと思ふと無理にでも許された範圍のことはしなければ氣が済まないのね、莫迦ねえ、身體のためにもならないし、氣分も悪くなるばかりだつてことを知らないんですからね。

◇

損だ、得だ一で見當違ひの遊び場所と比較して考へるんですもの、堪らないわ

一十圓なら米一俵、十五圓なら本部屋で總花一

なんてあたまがどうしてもあるのね、カフェーは目的が違ふんですもの、かうした男ばかりぢや、そりやさびれるわよ、女に惚れたり浮氣をする氣になつてゐる間はそれを云はないけど、酔つたり女に飽きたりすると直ぐ此の腹にあることが出るから判るわ

損か得か一それも見當違ひの一で遊びや女まで考へるんだから、男はみんなひどい我利々々よ  
本心は……

カフェーの客つて

イカ物食ひの中トロ組よ —— 銀座パレス 一二三さん

煮ても生でもイケないのね

◇

— 餘り赤いところも感心しないし…と云つてトロちやベトくしすぎるし、まア中トロがいゝね、サビを利かして—

子供ならまぐろの鮮でありさへすれば、胴中の肉だらうがトロだらうが、文句を云はずに喜んで鼻を鳴らして食べるでせう、所が老人になる程やれ—中トロに限る—などゝ難かしいことを云ふ、まともちや駄目なのね。

◇

牛肉ならヒレではなくてロースそれも幾分脂の勝つたの、すつと變態でコマ切れ…

鯉の刺身なら皮つき…あの皮と身の間をコツと噛む舌觸りのいゝこと—

萬事が此の調子

野菜でも生では困るが、さりとして過ぎても…

と男は云ふでせう、悪い趣味ですわ、カフェーの客つてエのは全部がこれです。

◇

藝者、遊女は金さへ出せばいくらでももてなしてくれる…が職業意識が常に離れない、どの男にでもさうする、手練もきまつてゐる。それが嫌だ、これが判ればもう遊びは面白くない、併し素人ちや手数がかゝる、ウブすぎて最後まで行くと拙巧も手練もなく、だらしがなくて面白くない、別れるにしても簡單には運ばない。

—男にはこれも苦手です、私遊女給は云はゞまぐろの中トロで、商賣女でも素人でもなく、どつちつかずでせう、これが何より男、殊に老人には嬉しいんですわ、何とかしてこの仲煮でも生で

もないものを噛みしめて正體を味はつてみたい……といふのが望みよ。

二三

「一二三さん！」

と名ざしでくれれば

「まあいらつしやい、昨日お電話したのよ、どこかで浮氣してらしつたんでせうひどいわ」  
それから飲む、騒ぐ、喋る……がまた

「一二三さん！」

と別なお客が見えれば、一寸待つて、ねーと席を立つて

「まあいらつしやい、どうしてたの……」  
でせう。

「商賣々々、稼ぐ氣にばかりなるなよ」

商賣女だつて腹があるからこんな言葉が出るんでせう……が

「何處かへ行かうか、箱根が丁度いよよ、何でも乗るぜ……」

と水を向けられても

「駄目、母さんに叱られるわ……」

とあつさり撃退するわね、と

―手敷をかけるなよ―

なつて―あゝ矢張り商賣女とは違ふナ、骨が折れるヨ―とニヤ／＼思ひ直すわけね。

若い方なんかですと

「活動へ行かない」

程度で、私達を友達位に思つてゐるのね、友達なら勿論素人つてわけだわ、全くの商賣女、ズブの素人―のどつちかに決つて了つたら男なんて来やしませんわ、来るとしてもいまのカフェーの客とは全然種が違ふわね、どちらでもあるし、どつちでもなさうーつてところが魅力らしいわ、

二三



だから眠たりなんかしたらもうおしまひよ、何故つて、素人が長々と寝る筈はなし、また寝れば素人すぎるんですもの、私達それには後は綺麗さっぱりつてわけには行かぬでせう、私達ね  
 なアんだ商賣女に限るよ……

男はだから失望するに決つてゐるの、食物に對しても女にでもまともでないものを味はうといふ下らない氣持は男には存外根強いものらしいのね、カフェーの客つてみんなその中トロ組よ。

遊びに見榮を――

飾る男は落第だわ

――淺草天國 桂子さん

こんなのに限つて焼トン組よ

「顎がだるいやうな酔ひ方してるわね」

「あゝ、廣小路でプランで焼鳥さ、安くていゝもんだぜ」

永い馴染でお店や私達のやり方も知つて居り、また私達も上のお嬢さんにはセツで下の坊ちゃんは……なども何もかも判つてゐる間林ですと、平氣で焼鳥屋で酔つてきた話などをしますけど、初めてか二度ちやなか／＼素直にかうは出ないわね。

「御機嫌ね、いゝところのお歸り？」

ともちあげると

「久しぶりで二三軒寄つてきたよ、あゝ、あすこと そら、仲見世の……」

「まア……」

「少し過ぎてゐるから何か軽いもの……」

云はしておけばね。

名のある小料理屋かカフェーできこしめして来たのなら、三本も五本も楊枝を使つて、齒の間の焼とんを掃除する筈はないんですし、十年もアルコールに縁のある商賣を私達してるんですもの、側へ坐つた時の酒の匂ひでどの程度の飲み屋を歩いてきた位ちやんと見當がつくんですもの大きなことを云つたつてね、カフェーはボルから他所で酔つて安くサーピスだけ……フン、ナレたものよ、ねえ、こんなブランかアタピンのコップ酒を飲んで来る様な男に限つてそのくせ自惚れが強くて早合點よ

「電話かけてくれない、今晚くるやうに」

お互に時と場合で扶け合ふのが私達だから、誰かさんの代りに受話機を外して

「モシ／＼アアさん、こちらは天國の……」

と未だ名前も云はない先から

「あゝ、どう、忙しいの、今晚休めんのかい、恩にきるよ……」

かうまで早合點されて、遠ふ、私は代理よーとも云へない「とに角今晚きてよ」と云ふと

「店ちやどうにもならないよ、出ようよ」

でせう、あとでまたかけるわーと切るより仕方がないわね、女の聲だと直ぐ自分が當りをつけてる者だと思つちまふのね、女が少いからよ

「誰だい、え、名前を云へよ、判らない……」

と電話で云はれる位女にとつて心細いことないわ、かう出られるとボウと熱をあげるものなの

酒屋で飲んで、飯も屋で食つて、それからカフェーで安くーなんて男には、こんなおつとりした電話はかけられないことになつてるのよ、ものゝ道理で……ねえ女の氣持に氣をつかふのはいゝが、遊びの見榮に氣をつかふからおつとり出来ないのよ、かうした落第點が多いわ。

女に田舎を訊いて

夫からなんて野暮な手よ —— サロン春地階 眞琴さん

女給にセンチは見當違ひ！

私達若いのは、チツプ暮しには違ひないけど、しがない家業——なんてそんな古風な感情をもつたことないわ、運のいい人は學校を出てお嫁に行くか、ショツプガールか事務員になるし、私のやうに恵まれなければ女給にもなるし……紙一重よ、人間なんて……どんな職だつて恥かしいなんてのあるわけないわね、別に威張りはしないけれど謙遜することもないわね。

——でも私達にも感傷はあるわ、自分から好んで女給になつたにしろ、止むを得ない境遇からしろ、何か自分に過失があつたためにしても、とに角他人に白眼で視られる商賣の女には同じ感傷があるわ、無心に育つて朗かに誰とでも距てなく遊び戯れた小兒時代への感傷、遠い青い故郷への切なる思ひ——

之れだわ、私は九州、遠いの

◇

お客は、ところが女給のこの子供——故郷への感傷癖をすっかり心得てゐるのね。

「君、九州ぢやないか、何處だい、僕もあつちなんだが……」

新米の時はいろ／＼本氣にしたわ

「博多ですの……」

「博多はいゝね、歸りたくないから……」

私達を素直な娘の心にして、話を面白く隔てなくしておいてそれから……つていふわけね、カフェーだけでなく、何の遊びでも直ぐ男は田舎を訊くんですつてね、野暮な話だわ、永く商賣をしてゐればゐる程、父母や故郷や村の山々や、小兒時代を戀ふる氣持つて強くなるものだけど、それは自分の臉の内だけのことで、現實に自分の村や家を知つてゐられるとなつたら愉快ぢや

ないものよ、獨りでソツと味はふ感傷だからこそ強い、それを男は女に郷愁を先づ併せて……といつも、同じね。

「私盛岡よ」

「何町だい、花巻へは時々行くぜ、北上川はいゝね」

直ぐいゝ氣になつてね、馴れゝば關東の方だと思へば近縣の生れだと云ふし、東北らしければ向ふにするし、關西なら……と、それゝ話合せる位のことわね、博多なら水たき、盛岡なら北上川の流れ、金澤なら鏡花や鱒一男つて行きも知りもしないくせに電柱廣告や十錢本の知識まで女の前だと持ち出すんですものね。

◇

東北だつて仙臺と秋田、青森と山形では言葉が違ふのに、その違ひ方まで知つてゐる人は少いからゴマ化せるんですわ。

「私は違ふけど、あの人はさうなの」

ねち〜と根掘り葉掘り訊く男があつたら、お友達を呼んでサツと代つて貰ふ、お友達の男は私が引受ける……共同戦線ね、多勢の男ですもの……でなければあつさり

「私江戸ツ子、五代も續いて……」

それでいゝの、ほんとの江戸ツ子つて少いから……

―田舎を訊いてそれから……男の大半は之ですもの、私達にだつて自然對策が多くなるわね。

金や遊びの自慢で

女は釣れない ― グランド銀座 ひさしさん

私たち女給が欲しい男は？

◇

―白粉を落したさつぱりした膚でウェーブの髪の毛のこげる臭ひも忘れてひつゝめの世話女房になれ

たらー

私ばかりでなく、手がカサ／＼して笑つた眼尻に小皺が浮ぶ年頃になれば女給さんは誰だつてこれだけが望みです。

◇

何人もの召使をつかつて大きな料理屋でも切り廻してみたい、自家用車のある家で奥様と呼ばれてみたい：

一時はさう思ひます、仕方がありません、すんと違つた高い贅澤な暮らしをしてゐる人達ばかりの相手をしてゐるんですもの、毎夜ね、自然さうした人達の世界に憧れ、生れ育つた境遇には戻れないの、若いとー

丸鬘に結つて帳場へ坐つて、顎で大勢を使つたつて、女が落着けば男はまた遊び始める、店だつてトン／＼拍子にばかりは行かぬ、本家の奥様にも義理はあるし：世の中つてさう易しいもんじゃないでせう、店を投出して女給商賣に逆戻りの方が、つく、氣樂つてことになるの、金持へお嫁

入りしたつて下らない話ぢやありませんか、幸福にすつと暮してゐる女が何人あります。

華々しく美しがられて、私達の眼の前から消えては行つても、また悄然と戻つてくる人ばかりぢやありませんか、一度経験してへばお金持も、玉の輿も、出世も、夢みたいなものですわ

◇

私は羨ましいと思ふお友達が二人しかないの

一人は九年越し惚れ合つてやつと一緒になつてバタバタと四人續けて年兒を生んでいゝおかみさんになつちやつたひと

もう一人は店にゐる時から、遊ぶ男はいや地味な守衛か門番のをちさんで、道樂も遊びも覺えず半生を過してきて私だけをまもつてくれる男：と常々云つてゐたことを眞實に實行してどこかの守衛さんを主にし郊外へ地所や家作を買込んですつかり納まつてゐる方ー

此の二人です、羨ましいのは：

◇

「世話する人があるんだらう……ない、ちや何か始めてみないか、變な意味でなく、え、後援するよ……」

もう落着いてもいゝ年頃だ、さうぢやないか——はつきり言葉には出さぬがアリ——とその意味を匂はせてポツ／＼口説くか、荒い余迷ひをして氣を引くか……男つてのはそのどちらかです、年増を脱落させるにはこれに限ると思ふんでせうか、ひどい見當違ひですわ

——一度遊びの味を知つたら生涯抜けるものぢやありません、餘裕が出来た、宴會がキツカケになつた……で何かあればきつと遊び癖が出るもんです、カフェーのお客に初めて遊ぶ男なつてのな  
いちやありませんか、話と云へば何處の店の誰、昔の遊びの様子……にきまつてゐるわ——

そんな金や遊びの自慢話で女給が釣れるもんですか、私達が望んでゐるのは反對よ、金や遊びを知らぬ男しか持つてゐないもの——つてことを男は知らないの、それぢや駄目だわ、金を使つて女に接してゐると、そればかりに氣をとられて了ふのね……だけど私迷のかうした氣持、誰にも斬つて貰へないンぢやないかしら……

## 遊び好きの男は

### 例外なしに見榮坊よ

——處女林白中隊 唄路さん

五月蠅い男は浮かれます

◇

——御冗談もンでせう、私達女給はしてゐても淫賣ぢやないンですから——

と、にべもなく肘鐘を喰はしたンぢや二度と來ツコありません、いづれ斷るには斷るンですが、斷れればそれまでの男——と睨んでも、それを十度來させるか三度でおしまひになるかは女の頭腦と腕次第ですわね

——よく考へてみてね——

と二月も三月も引張る方法を探る方もゐるやうですけれど、私之れは實明ぢやないと思ふの、結

婚話や入籍問題など、違つて、どうせ男の望むのは遊び半分の浮氣ですもの考へて出来るもンぢやありません、男だつてそれ程鈍感ぢやありませんから、女が懸命に考へてゐるか、一時逃れにさう云つてゐるか位五、六度も通へば判るンですからね

—畜生太いアマだ—

こんな眞面目な返事で引張つて費はした揚句ドンでは男は憤りますわ、後まで心にカスが残るの

◇

—未だ知合つたばかりでそんな—

と云へば、同じ意味でも言葉が違ふし、積極的になる出来ないはこれなら男の勝手つてわけですもの、怨まれツことはありません、それよりいゝのは何にも口へは出さず、後であなたが悪い、熱心が足りない—つてキメつけることね

「今晚新橋で待つてなよ…」

と云はれたら

—いゝ氣持お酌してね—

つて工合にお友達達の猪口や手的で手早く五、六杯あふつて、苦しい頭が痛い—つて私達の部屋へ引上げちまふか、始終お友達に付添つて貰ふのね、でもそれだけぢや不十分よ、男は短氣で、疑り深いから：明日男が何とも云つてこないうちに電話か速達で先手を打つ

—餘り飲ませるんですものひどいわ、私グロッキーになつちやつたぢやないのお店へ出られるかどうか判らないわ、悪い人ね—つて式よ

非は俺にあるかな—つて氣持をチョットでも持たしておくことだわ

◇

でも口説かれればいつかは断らねばならないし、断ればお客ぢやなくなつちまふのですから、口説かせないのがいちばんよ

—静かなレコードをかけボックスに二人が向ひ合つて、洋酒でも舐めてゐたら自然石佛ぢやないんですもの、口説く氣になるわよ、だからしんみりしちや駄目、多勢で暢氣に飲んで騒いで、

浮々した氣分にさせること、浮かれちまへば男なんてそれまで妙なことを云ひ出す機會を見失つて了ふのよ。

その代り寄つてたかつて食べる物やチップをねだつちや不可いわ

遊びが高いものにつけば何かでその代償を欲しがるでせう、何か…つたつて他に何もありませんもの、私達へ銚先が向くわね、それちや同じこととせう、だから決してねだらないの、女が慾張らないと男は友達みたいな氣になつて、人が悪くはなれないものよ、友達なら口説きにくいわけね

それで商賣になるかつて、え、結構ねえ、どうしてつたつて、遊ぶ男つて例外なしに見榮坊ですもの、よくされゝばどんな事があつたつてケチにはなれないんですもの

女給の顔さへ見れば

飯！ 飯は随分失禮ね

——新宿樂城 糸姫さん

イヤなお客とご飯は眞つ平！

猪口の手前側を下げ、向ふをすつと上げて

「一つ頂くわ…」

と男の前へ持つて行つた時、無言で銚子をグツとその猪口を叩へて強くナミ／＼と注いでくれる方なんかないわねえ、受け猪口押へ注ぎ—つて昔から云ふちやないの、

—あたし、あなたに思召しがあるけど—

つて意味よ、黙つてかう盃を出したら…男が女にさす場合だつて同じさ、知らないね？ あなた



も……ちや、直ぐお尻へ手なんかもつてくる組だわね、粹な男が少くなつたねえ、女はまア兎に角として……

「大森へカニで飯でも食べに行かうか」

「これはいゝ方」

「おでんでも食べるよ」

目的があるとこれだ、それ程私達お腹減つてないわよ、お茶漬位は食べる金いつだつてあるわ、自慢ぢやないけど、氣心の知れない變な望みを持った男と向ひ合つて御飯いたゞいて甘味しい？ ゆつくりと落着いて何のわだかまりもなく好きな同士が一つ鍋を突つく所に味があるんでせう、酒は違ふわよ、酔ふものよ、少し位虫が好かなくなつて相手は出来るわ……が御飯はさうはいかぬ眞面目な酔はないもんです。

「飲みに行かう……」

と、だから女に云ふのは斷はないけれど

「御飯食べよう……」

とはたゞの間柄ぢや云つちやいけない言葉さ

おまんまを食べ合ふ仲一つてのは、だからたいしたものよ、そんな顔しなくてもいゝわよ、古人の金言よ、それを知らないから、やたらに女給の面さへ見れば飯！飯！  
つて失禮なことをおつしやるのよ餘り云はないことね

自動車だつてさうぢやない

乗つて行かないか、丁度通るから……」

親切な氣持で云つて下さる方もないこともないわ、でも

送らう……」

と云へば親切の裏に大抵何かあるでせう

門のある家に住んで女給してるのはまアないわねえ、炭屋の横丁か路次裏にきまつてゐるわ、二階借りが長屋の娘が金のかゝつた着物に白粉をつけて稼いでゐるんだもの、近所トりに氣兼ねもするわよ、ケバ／＼した身なりで丘の出る路次裏を風を切る氣で歩く女があつたら、それは大馬鹿よ、陽かけを下を向いてどんな遅くなつても電車で歸るからいゝのよ

◇

ブ／＼二時頃自動車を路次口へ横付けにしたら二三日みなさんに挨拶も出来ない程心を痛めるわよ

「七十圓か八十圓の月給で細々暮らしてゐるのに、毎晩車で戻りますので近所の手前…」と或る馴染の方の奥さんにこぼされた時、やつぱり女はいゝと私思ひましたよ、立派に暮らしてゐてさへそれです、私達なンざ私さらよ

「家の前まで行け、歩くこたアない」

男は全く心臓が強いわね、え自動車の中でハラ／＼してゐるのにね、ひとりよがりでも何でもか

も女にしてやれば女は兎に角悪にきる、どうかなる…と思つてゐるんだからとても助からないわ。

私は愛してる

なんて頭の悪るさ

——兩國トヨタ 笑子さん

男は圖々しくて卑怯者！

x

「あの娘はなんて云ふんだい」

「氣が多いわねえ」

「お互ひぢやないか」

新しい綺麗なひとがくると男は必ず眼をつける…が、ビール一本にコーヒ一杯で三時間…なん

て鼻つまみが新しいひとを扱し出してすることはいち／＼小面憎いわ

四四

「活動見た？ いゝですよ

私の愛を入れて下さいーなどと幽の浮くやうなことをお天気、暑さ寒さの形容などと一緒に毎日女の許へ書いてゐるから話と云へばせい／＼こんなこと位

誰も相手にしないのに當人は一向平気で、顔を拭いたり頭を撫でたりして粘つてゐる

「一度送らして下さい

と歸り際に云ふのはそのくせ必ず忘れない、どの店にも一人か二人はきつとかういふ客がゐるらしいわね、裏では手紙を書き、表では戀心を示すために店へ現れるといふのね

「隠ぎに行かうか…飲まう…」

と金を撒いて女を攻めよう…つてのはザラにあるけど、金を遣はずに皆に嫌はれ乍らも手紙で氣持を傳へよう…といふのは餘りない手だから、若い文學好きの少女などはうっかりだまされるの

ね。

危い！ いやな奴！

私達はハラ／＼して見てゐるんだけど、時々あるわねえ、間違ひが…

—花が咲きました、私の心は—

なんて手紙、女學生かお嬢様に出すものよ、男が眞剣に戀をするのは失戀しても後々まで綺麗なものよ、美しい氣持や思ひ出が残るだけの相手に限るの、顔や心は良くつたつて女給や商賣人だと、男は

「なんだ、たかゞ女給ぢやないか…」

と、はねつければ平気で爪の垢ほどの戀心は捨て、了ふし、受け容れられれば

「やつぱり、わけねえや」

と、見くびるでせう…

四五

こんな話あるわ、半歳も通つたんですつて、男が、その誹子で、手紙と糶りで氣の毒に思つたのね、で一度店が閉つてから散歩したんですつて、と運悪くねえ、警官に見つけられたのね。

「店の客で、散歩してくれと仰有るから……」

女は正直よ、ねえ、ところが男は

「僕には妻も子もある、こゝに勤めてゐる者だ、女が何處かへ泊らうといふんで……」

ですつて、憎らしいわね、二人の話が合はないから女は賣淫行爲つて名目で拘留三日、癪ぢやな  
50.

x

それだけぢやなく、女が出てきたらそいつまた以前のやうに店へも来れば手紙もよこすんですつて……

いやな奴ねえ、卑怯ぢやないの、俺の好きな女だ——と云へないくせに——此の男ばかりぢやないわね、でも男はいざといふドタン場になれば、自分の地位や親や同胞の方がどうしても大切な

よ、形勢が悪ければ途中で引揚げて了ふ氣持のゆとりは常に持つてるし、又

——事情があるんでねえ——

と夫婦になれぬ理由もいつでも立てるし……一時は好きで通つても見下される私達はかうした損なものを持つてゐるから駄目よ、眞剣な切端つまつた失戀なんかないのを知つてゐるから、男は私達に變な戯れの戀をしかけるとも云へるわね。

——私は愛してゐる——

なんて云ふの頭が悪いのを、だから示すやうなものだわ。

全國主要驛賣書店發賣中

(新刊は毎月十種類發行)

◇ 目 書 行 刊 ◇

世渡り秘訣百ヶ條	谷 孫六著	定價十錢	送料二錢
へそくり問答	谷 孫六著	定價十錢	送料二錢
人は何故に貧乏するか	高島素之著	定價十錢	送料二錢
あばたは糸くぼ	高島素之著	定價十錢	送料二錢
異國の横顔	横原玉葉著	定價十錢	送料二錢
姓名で結婚運がわかる	横原玉葉著	定價十錢	送料二錢
金も、名も、戀も	横原玉葉著	定價十錢	送料二錢
商店經營問答	渡邊支著	定價十錢	送料二錢
鮎釣の難手	佐藤垢石著	定價十錢	送料二錢
諸届の難形	北三二著	定價十錢	送料二錢
人は職業で適食が違ふ貴方の適食は何か	日本料理研究会編	定價十錢	送料二錢
人を説く秘訣百ヶ條	高山晴洲著	定價十錢	送料二錢
夫重のとき 得心構へを禪に訊く	山田靈林著	定價十錢	送料二錢
何が私を不良にしたか	讀賣新聞社編	定價十錢	送料二錢
職業婦人を女房にもてば	讀賣新聞社編	定價十錢	送料二錢
孫子の戦法	谷 孫六著	定價十錢	送料二錢
孟子の戦法	谷 孫六著	定價十錢	送料二錢
エチオピア皇帝とムツソリーニ	永松淺造著	定價十錢	送料二錢
犯罪者の心理と手口	美山一耶著	定價十錢	送料二錢
高麗の秋 匪賊物語	讀賣新聞社編	定價十錢	送料二錢
男性への抗議・女性への反駁	讀賣新聞社編	定價十錢	送料二錢
歐阿の戦雲は日本の景氣に何う響くか	中木徹郎編	定價十錢	送料二錢

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は當房直接又は最寄賣店へ。送金は振替又は郵便切手のこと。

東京麹町有楽町二ノ二番 森田書房 (會及普賣即子册)  
 東京振替四二五二番 森田書房

有所權版

昭和十年十二月十一日 印刷  
 昭和十年十二月十五日 發行

ネオンサインで男をみれば

定價十錢 (送料二錢)

著者 讀賣新聞社

發行者 東京市麹町區有樂町二ノ二 森田書房

印刷者 東京市京橋區銀座西六ノ二ノ五 平野留松

發行所 東京市麹町區有樂町二ノ二 森田書房  
 電話銀座四七一〇・四八二四番  
 振替東京四二五二番

全國配給所 冊子即賣普及會  
 大阪市北區堂島上二ノ二 森田書房  
 京阪神特約店 大阪府豊中町櫻塚一〇六 森田書房  
 中国・四國・九州 配給所

〔特約〕東京鐵道局公認 (鐵道弘濟會・鐵道保養會・鐵道投產會)

各賣店名有・ドンタス聞新眞街・ドンタスムーホ・吉賣各

全國主要驛書店發售中

(新刊は毎月十種類發行)

◇ 目 書 行 刊 ◇

馬の見方と穴の狙ひ所	楠波一著	定價二十錢(送料二錢)
正力松太郎と小林一三	天草平八郎著	定價十錢(送料二錢)
東京巨人軍の陣容	讀賣新聞社編	定價十錢(送料二錢)
品物の買ひ方・賣り方	佐々芳雄著	定價十錢(送料二錢)
喀血八年の私が健康をかち得るまで	玉生辰雄著	定價十錢(送料二錢)
微笑・苦笑・爆笑新作落語集	昔々亭桃輔著	定價十錢(送料二錢)
ガレンハリズム	孫六著	定價二十錢(送料二錢)
世渡り川柳なる程草紙	孫六著	定價二十錢(送料二錢)
生きた富豪術	孫六著	定價二十錢(送料二錢)
昭和十一年開運の秘訣	榎原玉葉著	定價二十錢(送料二錢)
ネオンサインで男を見れば	讀賣新聞社編	定價十錢(送料二錢)

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は當房田接又は最寄賣店へ。送金振替又は郵便切手のこと。

(會及普賣即子册) 二ノ二町樂有町麴市京東  
房 書 田 森 番二一五二四替振京東

讀賣新聞社編

男性への抗議

女性への反駁

森田書房版

【定價拾錢】送料二錢

女性側から金子しげり氏、平田のぶ氏、河口愛子氏、厨川蝶子氏、小菊子氏、深尾須磨子氏等々の有名どころが出で、……そして男性側から村松梢風氏、杉山平助氏、新居格氏、大迫元繁氏、島中雄作氏等出、互ひに異性に對して言ひたいことを言ひ合ふ、誌上は宛然討論會場であり、社會への教訓であり、男と女の茶話會場でもある。

讀賣新聞社編

〔定價十錢〕送料二錢

## 野球界に君臨する

### 東京巨人軍の陣容

—世界制覇は何時か—

我が野球界に君臨する職業野球團、東京巨人軍の陣容を語る！

各選手の球歴、渡米遠征の收穫、歸朝後各地轉戦の成績等、ファン必讀の書。

森田書房版

谷孫六著

## 世渡り秘訣 百ヶ條

實益滿點の處世參考書、萬人の必讀書として發賣以來全國より好評を受け、版に版を重ね、パンフレット界、發行部數の新記録を作つて居ります。  
御家族、知人の大方へ廣く、深く、座右の書として薦められんことを希ふ次第です。

森田書房版

山田靈林著

失意のとき

得意のとき

心構へを禪に訊く

[錢十價定]

錢二料送

結局は金と戀と飯と名と睡の問題から解き始めて、相場ですつた時の心構へ、丸裸素寒食になつたときの心構へ、借財が多くなつた時の心構へ、食へなくなりさうな時の心構へ、金を儲けた時の心構へ等々………失意のとき、得意の時の心構へを訓へて餘りなし。木著こそ處世訓の最高峰!!

(發刊以來、版に版を重ねて大好評たる所以)

天草平八郎著

定價十錢(送料二錢)

正力松太郎と

小林一三

—如何にして今日を築いたか—

新聞界の巨星、正力松太郎と事業道の逸才小林一三。共に生きた大衆相手の事業家である。如何にして今日を築いたか。読んで、そこから人間社會の要諦を識る。十錢本だが價値は一圓本にも優らう。

森田書房版



これは面白い

生方敏郎著

漫談論語

定價二十錢  
送料二錢

論語と漫談、なんだか丸きり性質の違ふ  
言葉結び付けた様に思はれるかも知れ  
ないが、必ずしもさうでない。論語と言  
へば先づ子ヨン響のお爺さんが講釋をす  
るものだと早飲み込みをしてはいけない  
論語はもつと分りよく、且面白く又氣の  
利いたものなんだ。

とても爲になる

房書んもんさ。

(ルピ川石)二ノ二町樂有區町麴市京東

「處世叢書」既刊書目

松木千年著	三井・三菱 住友・各家の	家 憲・家 訓	五四六 頁	特 料 二 錢
同	店員 訓	二百八十 條	六二 頁	同
松坂屋教育係長 岩崎隆著	働かざる者は食ふべからず		六八 頁	同
松木千年著	安田・住友・三越 松坂屋・大丸・各店の	實業 訓	六四 頁	同
現實處編輯部著	街のギヤング 檢舉物語		四八 頁	同
松木千年著	實位の安 眠法		六四 頁	同
同	朝起きの すすめ		六四 頁	定 價 二 十 錢
清水安彦著	焦るな、落ちつけ(肚の据る方)		五 六 頁	同
同	その逆を行け(頑張る力)		四 八 頁	同
成木大業著	これからの暮 し方		四 八 頁	同 二 十 錢

發行所 東京市東區麴町二ノ二(石川ルピ)  
東京市東區麴町二ノ二(石川ルピ)房書んもんさ  
發行所 東京市東區麴町二ノ二(石川ルピ)  
東京市東區麴町二ノ二(石川ルピ)房書んもんさ  
發行所 東京市東區麴町二ノ二(石川ルピ)  
東京市東區麴町二ノ二(石川ルピ)房書んもんさ

355  
1213



# 週期的不眠に 苦しんだ予の経験

早稲田大學圖書館長  
經濟學博士 林 癸未夫 先生

此の夏中自宅に引籠つてゐたせい、神經衰弱にかゝり不眠から來る頭痛や精神的な疲勞で大分健康を害した。それに三日目に一度位週期的な不眠に悩まされる。そこで予が雑誌や新聞の廣告で知つてゐた『はれやか』を飲んで見ると氣持が妙にほつとした氣分になつたので、それ以來不眠に悩んだ翌日や少し勉強が過ぎた時に之を服むことにしてゐたが、今迄の様な疲勞も覺えず心身が爽快になつて頭痛などを覺えなくなつた。それ以來私の様な状態にある學究や學生諸君には極力この一服を奨めてゐる次第です。

因みに主効は頭痛・齒痛・不眠症・神經衰弱・ヒステリー・疲勞恢復・めまひ・二日酔・船車暈・胃腸に基づく頭痛 藥價は三十錢・五十錢・一円・二円・三元・五円各地藥店にあり。試供藥文獻御入用の方は東京銀座一ノ五日獨醫化學研究所宛御申込みになれば無代進呈致します。

## 頭の 栄養剤 かゆれは

東京市内で一番よく賣れる

# 讀賣新聞

朝刊二十頁  
夕刊四頁  
(但水曜土曜は八頁)

東京座銀  
讀賣新聞社

終